

ロシアにおける日本漢文の研究史および 日本漢文の教育状況と学習者の意識に関する事例研究

グリブ ディーナ

1. はじめに

1.1. 研究の背景

日本国外における日本研究の拠点といえば、中国および韓国の各大学の他、英国のケンブリッジ大学、米国のコロンビア大学などが名高い。ロシアの日本研究及び日本語教育は、国際的にほとんど知られていないが、18世紀以来の長い伝統がある。近年にはさらに注目される分野となっているが、ロシアにおける日本語教育の関心は、現代日本語に集中し、日本言語史に関する教育は十分になされていない。しかし、日本の歴史・思想史・文学を勉強するには、漢文の知識は不可欠である。ピジョー(1989)では、近年は日本国外における日本学でさえ、原史料を使わなければ認められない段階に至ったとの指摘がなされている。

筆者は、日本の中世史を学ぶために来日した際に、自分自身の漢文史料の読解能力の不足という問題に直面した。そのときの経験に基づいてロシアの大学で日本および日本語について学び、漢文に関心のあるロシア人日本語学習者（以下、学習者）にとって、ロシアの大学においても日本漢文の学習がある程度可能な環境が必要であると考え、学習者を対象とした日本漢文の教育に研究のテーマを設定した。これに先立ってロシアにおける日本漢文教育の実態把握が必要と考えられるため、本稿においては、ロシアの日本語教育機関にどのような日本漢文コースがあるかについて調査するとともに、日本漢文に対する学習者の意識について検討していくこととする。

なお、本稿での「日本漢文」という用語の定義をここで整理すると以下のとおりである。築島(1980)によれば、中国の「漢代の文章」あるいは「漢語つまり漢民族の言語の文章」とともに日本人が漢文体の表記法で作成したものも漢文の範囲に含まれる。後者のうち、本来の漢文の構文を具備したものは「純漢文」と称され、日本語の語序の混入した漢文体の文章には、和化漢文・変体漢文・記録体などの称がある。それを踏まえ、本研究に使用する「日本漢文」という語は、純漢文・和化漢文を問わず漢文体の表記法で日本人により作成されたもの、そして中国の漢文に訓点または訓読文が施されたものを意味する。

1.2. 先行研究

日本では、ロシアにおける日本語教育に関する研究がすでに発表されており、ロシア帝国・旧ソ連・現代ロシアを背景に日本語教育の成立及び沿革を紹介する寺川(1964)、加藤(2008)などの書籍がある。また、特定の時期について紹介する高野(1952)など、多数の論文が発表されている。本稿ではその成果を参考にし、アルパートフ(1991)や2002年版の『ロシア文系事典』の関連記事をはじめとするロシア語で発表された研究

をもって補足を加えている。

また、ロシアにおける日本語教育の現況に関しては、国際交流基金のもとで 2002 年に出版された『日本語教育国別事情調査 ロシア・NIS 諸国日本語事情』と国際交流基金のホームページにて公開されている 2007 年のデータがあり、日本漢文の教育の現況に関する調査において参考になっている。

一方、外国人を対象とした日本漢文の教育に関する研究は、比較的新しい分野である。近年、二松学舎大学のもとで「日本漢文教育研究プログラム」・「日本漢文学の世界的研究拠点プログラム」が実施され、外国人に対する日本漢文教育が注目を浴びた。欧州・英語圏・中国・韓国・ベトナム・タイなどの現状が紹介されたが、ロシアにおける日本漢文教育の状況は管見の限りではこれまで紹介されていない。

1. 3. 本稿の目的

ロシアにおける日本漢文の研究の沿革・状況・需要に関する情報は未紹介のところがあるため、それについて整理することを本稿の目的としたい。

また、本稿では、ロシア人による日本漢文の研究成果をまとめ、日本語教育機関における日本漢文教育の事例について検討する。また、それとともにロシア人日本語学習者に対する聞き取り調査を通じて、学習者の漢文教育に対する態度及び要求について検討する。さらに、日本漢文教育の現状と学習者の要求を踏まえたうえで、ロシア人学習者を対象とした日本漢文教育への提言について考察する。

2. ロシアにおける日本漢文

2.1. ロシアの日本学と日本研究の歴史

ロシア語の文献に日本が初めて出現するのは、17 世紀であることがエルマコーワ (2005) によって指摘されている。『メルカトル世界図』¹等を参考に、1670 年にロシアで出版された『宇宙誌』には「ヤパン島」すなわち日本の記述がある。日本の地理、政治体制、歴史について記述されている²とともに、「Азбука у них никакого нет. Только некие вымышленные точки пишут, и тому научены (いかなる文字も持っていない。ただ思い付きの点を書くのみで、それを教わっている)」と記され、日本語に関する知識が全くなかったことを表している。初めて、正確な日本語の知識を伝えたのは、日本人漂流民や日本を訪れた公使と船乗りであった。

ロシアにおける日本語教育は 18 世紀の初めに起源を発するが、当初は継続的な教育はなされておらず、ロシアの極東地域に流されてきた日本人漂流民が当時の首都サンクトペテルブルクに連れられ、日本語教師となったのである。1705 年、大坂の質屋の息子とされる伝兵衛がロシアにおける最初の日本語教師になり、ロシア初の日本語コ

¹ネーデルランド人 Gerardus Mercator が 1595 年に著した世界地図。

²日本語の単語の表記や記述の内容は、日本語→オランダ語/ポーランド語/ドイツ語等→ロシア語のように複雑な翻訳過程を経たため、意味不明な単語もあるが、元の形が窺える *tensam/* (天皇様)、*/daer/* (内裏)、*/taikosama/* (太閤様) 等の単語も伝わっている。

ースが開設された（高野 1952）。

1733 年、同じく遭難後にロシアに漂流した薩摩出身の船乗り、ゴンザがサンクトペテルブルクに送還された。1739 年に 21 歳の若さで没する前に、薩摩方言を取り入れた『スラブ語・日本語新語彙』をはじめ 6 点の著作を著わした。1782 年、伊勢から江戸への途中で大黒屋光太夫一行がロシアに漂着し、大黒屋光太夫がロシアの首都サンクトペテルブルクでエカテリーナ女帝の許可を得て帰国できたが、一行の内の二人がサンクトペテルブルクに向かう途中、シベリアのイルクーツク市に住みつき、イルクーツクの日本語学校で教師として勤めた。その後、日本語教育は低迷したが、1855 年に「日露和親条約」が締結され、日露間の外交が樹立して以来、継続的かつ体系的な日本語教育が次第に成立していく。

1870 年ごろサンクトペテルブルク大学に定期的な日本語コースが設置され、講師のゴシユケビッチと橋耕齋らにより和露辞典が集成されるなど大きな実績がうかがえる。1898 年にサンクトペテルブルク大学で日本語・日文学科が設立、1899 年に極東のウラジオストク市で日本語を専攻として設けた東洋学院が設立された。

現代的な日本学が成立したのは、20 世紀初めのこととされている。ロシアの日本学のパイオニアとも称される三人の研究者スパルヴィン（言語学）、ポズドネエフ（日本地理、歴史、社会）、コンラド（日本及び中国の歴史、文学等）により日本学の基礎が作られ、次第に研究が展開していった。

20 世紀、1917 年ロシア革命後に、日本語教育拠点がサンクトペテルブルク大学から首都となったモスクワ大学へと移され、日本語教育がモスクワ、サンクトペテルブルク、ウラジオストクの 3 か所に集中する。ソ連時代には、マルクス主義・哲学の影響が著しく、それを取り入れた経済学研究、社会学研究、史学研究が主流をなした。

しかし、30 年代には多くの日本研究者や日本語通訳を育てていた教育伝統は、スターリン時代に多くの日本研究者が抑圧の犠牲となったため、途切れてしまった（アルパートフ、1989）。日本語教育の復活は、1950 年代後半以降、モスクワ大学アジア・アフリカ諸国大学より始まった。

1990 年代、日露間の経済関係および文化交流が活発化した。同時に日本への留学などの交流も可能になったため、日本研究が活気を取り戻した。さらに、日本の文学、映画、ポップカルチャーの人気が高まった「日本ブーム」を背景に日本語学習者が急増した。それ以降、モスクワ、サンクトペテルブルク、極東地域（ウラジオストク、ハバロフスク、サハリン）、シベリア地域（イルクーツク、ノボシビルスク）などのほぼ各地で 80 校以上の教育機関において日本語教育コースが設置されている。日本研究をテーマとする学会も開催され、日本語の文献、論文、古典文学などの翻訳が出版されている。さらに各大学の紀要の他に、『ロシア科学アカデミー東洋学通報』・『アジア・アフリカ諸国研究通報』・『東洋研究』等の日本関連の記事が発表される全国希望の学会誌がある。

2.2. ロシアにおける日本語史および日本漢文の研究史

前節で述べたように、現在ロシアでは日本研究及び日本語研究に対する関心が高く、日本語教育を提供する教育機関が多数ある。しかし、寺川(1964)によって「ソ連の日本語学会の人々が現代(近代)日本語学の研究にのみ傾注して、古典日本語の研究をほとんどかえりみななかった」と指摘されるとおり、ロシアの長い日本語研究・教育史の中では日本の古文・漢文の研究史はきわめて薄弱なものであったといえる。

ロシアにおける日本研究の第一人者ともいわれるコンラッド(1891~1970)が著した『日本文学史—『古事記』から徳富蘆花まで—』には、日本漢文で書かれた作品の抄訳が載せられ、その文学的な特徴や価値について論じられた。それによって、初級の日本語学習者や一般人が日本漢文の作品の存在について学ぶ機会を得た。しかし、20世紀の後半にいたっても、日本言語史と古典語をテーマにした研究は非主流の分野であり続けた。

主要な研究成果には以下のような書籍がある。古代日本語を中心に動詞の活用、時制、命令形等について検討がなされているコルパクチ(1956)『日本語史概説』、『古事記』および『万葉集』等をもとに上代日本語の音韻、文法について、そして日本語の起源、アルタイ語族との関連性について論じられるスィロミャトニコフ(1972)『日本の上代言語』。そして、それに引き続き、9世紀~12世紀(平安時代)の日本語の音韻および文法について検討がなされているスィロミャトニコフ(1983)『日本の古典言語』。それらは、現在でも日本語学習者にも専門家にも読まれている。そして、それらの書籍が出版されて以来、日本言語学の参考書にも「古文」・「漢文」・「文語」などの章節がたてられ、それぞれの文体の体系や特徴について述べられるようになった。

2.3. 日本漢文のロシア語訳

日本の文学や思想を世界に広めるためにはその翻訳が必要である。学習者に古典と漢文作品に対する興味をもたせ、原文で読んでみたいという意欲をもたせるためにも、翻訳が必要である。日本漢文作品の英語訳は、1896年のアストンによる『日本書紀』の翻訳、1882年のチェンバレンによる『古事記』の翻訳などと19世紀末に成立した。

一方、ロシアでは日本漢文の作品の翻訳が発表されたのは20世紀後半のことである。ロシアで出版されている主要な日本語漢文の作品を出版年代順でリスト化したものが表I.である(ただし、一部分のみが漢文体で書かれた作品も含む)。

表I.から窺えるように日本漢文資料の翻訳がロシアで発表されたのは、最近50年間のことであり、漢文読解能力を有する数少ない専門家の成果であると指摘できる。

さらに、近年フランスでは藤原実資の日記『小右記』の抄訳が出版されるにいたったのに対して、ロシアでは平安時代貴族の漢文日記など、未だロシア語に翻訳されていない作品が豊富にある。中世ヨーロッパ人の日記の翻訳が広く読まれているロシアでは、仮名日記『紫式部日記』・『土佐日記』等を除けば、日本の古代・中世日記は一般には知られておらず、翻訳の必要性が感じられる。

表 I. 日本漢文作品のロシア語訳

作品	ロシア語訳の題名 発行年、翻訳者名、出版場所
『出雲風土記』	«Идзумо-фудоки» 1966年、ボーボワ K.A. 訳・注釈、モスクワ
『古代の風土記』	«Древние Фудоки» 1969年、ボーボワ K.A. 訳・注釈、モスクワ
『大宝令』	«Свод законов «Тайхорё»» 1985年、ボーボワ K.A. 訳・注釈、モスクワ
『古事記』 巻上	«Кодзики: Записи о деяниях древности» 1994年、ピーヌス E.M. 訳、サンクトペテルブルク
『古事記』 巻中下	«Кодзики: Записи о деяниях древности» 1994年、エルマコワ L.M.・メシエリャコフ A.N. 訳、サンクトペテルブルク
『日本書記』 上下	«НИХОН СЁКИ. Анналы Японии» 1997年、エルマコワ L.M.・メシエリャコフ A.N. 訳、サンクトペテルブルク
『大鏡』	«Окагами – Великое зеркало» 2000年、ディヤコノワ E.M. 訳・注釈、サンクトペテルブルク

3. ロシアにおける日本の古典語教育と漢文教育の事例研究

3.1. 調査の目的と概要

ロシアにおける日本の古典語教育及び漢文教育の現況を把握するため、ロシアの日本語教育機関 27 校に対する調査を実施した。

調査対象機関の選定に際して、国際交流基金により実施された海外日本語教育現況に関する調査結果を参考にした。日本語のコースが設けられている約 80 校のロシアの教育機関が国際交流基金によりリスト化されている。その中から、専門的に日本語教育を提供する大学教育機関を選定し調査対象とした。各々の教育機関では、専攻の名称が「地域学」・「東洋およびアフリカ学」・「言語学」などと多様であるが、日本語・日本文学・日本史・日本経済などの専修があり、日本専門家の育成が目的として掲げられていることを選定基準とした。

調査対象の教育機関に対しては、大学及び該当学科のホームページにて公開されているカリキュラム・時間割・シラバスなどの情報を収集し、漢文教育の有無及び実態について追及した。

調査の実施期間は、2012年5月～7月である。

3.2. 調査の結果

専門的に日本語教育を提供する大学教育機関に対する調査を実施した結果、ロシア国内においても日本語の古典語・漢文教育がなされていることが確認できた。また、漢文の教育形態に複数のパターンがあることもわかった。

残念ながら、日本の古典語教育と漢文教育がなされていない大学も多数ある。また、古典語・漢文教育を実施する大学の中でも、専修により一部の学習者に対してのみ古典語・漢文教育を実施する例も見られた。さらに、日本の古典語と漢文が取り上げられても、古文・漢文の読解力を育てるコースが稀であり、各文体の概要の紹介にとどまるコースの事例もみられる。

下記の表Ⅱ. では、日本の漢文をテーマとしたコースが3種類に分けられ、事例を伴い、整理されている。

表Ⅱ. ロシアにおける日本古典語及び漢文の教育

No.	科目の種類	実施例
1	日本語の歴史または古代～近世日本語をテーマとする授業	モスクワ大学アジア・アフリカ諸国大学 日本語日本文学講座の「古代日本の書記言語」(必須科目。文語、古文、漢文を演習形式で取り上げる) ロシア国立人文大学 東洋・古代文明学部極東史学・言語学科の「日本語の歴史」(必須科目。万葉集、祝詞、宣命、軍記の言語、物語などを題材にし、4学期にわたり各時代の日本語の特徴について取り上げる) サンクトペテルブルク国立総合大学 東洋学部日本語学科の「古代・中世の日本語」(必須科目。日本古代・中世の傑作を題材とし、古文と漢文の特徴について説明する) 極東連邦大学 国際地域研究学部日本語学科の「日本語の歴史」(日本言語学専修の学習者を対象とした必須科目。文学作品を題材とし、古文と漢文の特徴について説明する)
2	古代中国語の漢文をテーマとする授業	ロシア国立人文大学 東洋・古代文明学部極東史学・言語学科の「第二東洋言語—古代中国語」(選択科目。4学期にわたり、唐から漢までの古代中国の資料の解説演習をする。訓読は対象外。)
3	日本漢文をテーマとする授業	サンクトペテルブルク国立総合大学 東洋学部日本語学科の「漢文入門」(臨時科目。未出版の教材を使用)

表Ⅱ. の1番目の日本語の歴史または昔の日本語を題名とする授業は複数の大学にて実施されている。ロシアの日本学を率いるモスクワ大学アジア・アフリカ諸国大学では、それが必須科目「古代日本の書記言語」として設置されている。古文と文語に焦点が当てられているが、漢文および漢文訓読法も紹介されている。なお、使用されている教科書も出版されている。マエフスキー(1991)『古日本語の表記体(文語)の教科書』は、話題シラバスになっており、14課の内2課が漢文の紹介に割り当てられている。題材としては、①杜甫の漢詩、②孟浩然的漢詩、③堯舜伝説の3点が使用されている。

同じくモスクワに位置する、ロシア国立人文大学東洋・古代文明学部では、極東史学・言語学科日本語専修の学部3・4年生を対象とし、「日本語の歴史」及び「文語文の入門」という必須科目が設けられている。「日本語の歴史」では、2学年にわたり、万葉仮名・祝詞・宣命・軍記・物語などの特徴が紹介されている。『日本書紀』などが題材として、漢文の基礎も紹介されている。演習形式の科目である他、文体と資料の紹介のみならず、古典語および漢文の読解力の育成が目的として掲げられている。

サンクトペテルブルク国立総合大学の東洋学部日本語学科の「古代～中世日本語」、ウラジオストク市に位置する極東連邦大学の国際地域研究学部の「日本語の歴史」も上記に類似した内容である。極東連邦大学では、専修レベルの区別が設けられ、「日本語の歴史」という科目は、日本語言語学専修の学生にとって必須科目であり、日本の歴史専修と日本経済専修の学習者は対象外である。

表Ⅱ. で2番目の種類として挙げられている漢文教育の形態は、漢文を中国語教育に依存する方法である。この形態はモスクワのロシア国立人文大学東洋・古代文明学部にもみられる。極東史学・言語学科日本語専修の学生は、希望により「第二東洋言語—古代中国語」という科目を選択し、2学年にわたり、唐～漢の資料を勉強することができる。科目名通り、純粋な古代中国語の授業であるが故に、漢文が中国語として音読され、日本語として訓読されることなく、ロシア語に訳される。

なお、表Ⅱ. の3番目に挙げられた、日本漢文集中的に取り上げる事例は非常に少ない。サンクトペテルブルク国立総合大学の東洋学部日本語学科では、「漢文入門」が設けられているが、これは臨時科目である。その他、ロシア科学アカデミー東洋研究所付属東洋大学にも日本文学、古代史、中世史を専門とする研究者が所属し、院生および若手研究者に対して漢文指導がなされているが、体系的とはいえない。

上記のデータから窺える事実は、日本漢文の教育がなされている教育機関はきわめて少数であり、それもモスクワとサンクトペテルブルクの大都会に集中しているという状況である。なお、日本漢文の作品のロシア語訳が個人の専門家の成果であるのと同様に、日本漢文の教育コースも個人の教員により作成されていく一面がみられる。また、漢文のコースが設置されていても、入門レベルにとどまることが多く、授業に割り当てられる時間数の不足、学習者の無関心が漢文教育の妨げになっている。そこで、古文・文語体・漢文の教育が必須になっている場合は、簡略なコースデザイン、受講生の動機付けを考える必要性が窺える。

4. ロシア人日本語学習者の日本漢文教育に対する意識に関する事例研究

4.1. 調査の目的と概要

上記において、教育機関における日本語漢文教育の状況と事例、教育者側の実態についてみてきたが、以下は学習者側の漢文に対する意識についてみていきたい。本稿でいう意識は「ある物事に対して持っている見解、感想、思想など（攻略）」(『日本国語大辞典 第7版』) という意味で用いる。

学習者が日本漢文の学習を必要とするか否かという問題は漢文の教育を考えるうえで重要である。そこで、ロシア人日本語学習者の日本漢文に対する意識について調べることを目的とした調査を実施した。

ロシアで専門的に日本語教育を受けた上級日本語学習者の8名³を対象とし、簡略な聞き取り調査を実施し、日本漢文の学習経験の有無、学習の形態と内容、日本漢文に対する興味関心の有無、学習希望の有無とその理由について尋ねた。

調査の実施期間は2012年9月～2013年5月である。

調査協力者の詳細は表Ⅲ. のとおりである。

表Ⅲ. 調査協力者の一覧

協力者	性別	年齢	漢文学習の経験の有無	漢文に対する態度 ⁴
RM01	男	40代	○	+
RF02	女	30代	× (古文は○)	+
RM03	男	30代	×	-
RF04	女	20代	×	+
RF05	女	20代	×	-
RM06	男	30代	× (古文は○)	-
RM07	男	20代	×	+
RF08	女	20代	○	+

4.2. 調査の結果

本稿では、調査協力者が日本漢文に興味関心を持っている／持っていない理由、または日本漢文を学習したい／したくない理由として挙げた内容に焦点を当てる。

調査協力者の発言からは、下記のように日本漢文への関心・学習希望を妨げる要因と日本漢文への関心・学習希望を促す要因をそれぞれ3つのグループに分けて分析を

³ 調査協力者全員がロシア(または旧ソ連)において日本語専門教育課程を卒業している。そのうち、5名は調査実施の時点で日本語教育を受けており、3名は日本語に携わっている社会人であった。

⁴ 調査協力者が漢文学習に対して肯定的な態度をみせた場合は「+」と表記し、漢文を学習したくないという否定的な態度をみせた場合は「-」と表記する。なお、調査協力者は調査を意識して、肯定的な態度をみせた可能性があるため、結果は一般化できない事例研究として位置付けられる。

試みた⁵。

A) 日本漢文への関心・学習希望を妨げる要因

● 漢文が難解であるという意識

「現代語でさえ、難しかったのに漢文はさらに難しいと思います」(RM03)

「漢字だけが並んでいるのを見るだけでも、やる気をなくします」(RF05)

「先生のお話を聞いた限りでは、漢字も今より多く使われているし、読む順番もなんか普通でないから、難しいと思います」(RM07)

● 漢文の知識には実用性がないという意識

「将来、民間企業に就職したいから、古文や漢文の知識が活かせない」(RF05)

● 漢文を日本語の一部と認めない意識

「古文を勉強したときは、日本語の一部だと言われたから、納得しました(中略)漢文は日本語でもありません。中国語を習ったほうが良いと思います」(RM06)

B) 日本漢文への関心・学習希望を促す要因

● 漢文が日本語・日本文化であるという意識

「(漢文は)やはり日本語の一部だから、どういうものかぐらいは知りたい」(RM07)

「日本では、漢文が学校教育のカリキュラムに取り入れられ、大事にされている文化の一部だから、真剣に日本を知りたいと思う外国人もちろん習う必要があると思います」(RM01)

● 現代語の理解補助につながる期待

「古文だけでも、それを学んでみて『ああ、現代語はまだまだ簡単なほうだな』と初めて日本語を身近に、親しく感じられました。漢文を学んだら、現代語がもっと身近に感じられると思います」(RF02)

● 実用性に対する期待

「私自身は今まで(漢文の学習経験を)活かす機会がありませんでしたが、他の時代の文学を研究しようとしている人、殊に歴史について研究しようとしている人にとっては漢文の知識が必要だと思います」(RF08)

上記の結果は、非漢字圏の学習者にとって漢文が難解であるという指摘とは一致する。しかし、漢文を難解と考えるRM08の学習者は、日本文化の一部として学習したいという希望についても語り、漢文教育に対して肯定的である点が興味深いである。

なお、漢文学習を妨げる要因の「日本語の一部として認めない」と「実用性がない」という考え方は、漢文学習を促す要因「日本語・日本文化の一部である」と「実用性がある」それぞれに相当し、適切な動機付けにより、後者に変えられると推測できる。

⁵ 問答はロシア語で実施されたため、調査協力者の発言の引用部分は筆者による日本語訳である。

5. 考察およびロシアにおける日本漢文教育への提言

5. 1. 学習者の意識と動機付け

中国から日本に伝来した漢文は日本の知識人の書記言語の一つとなった。しかし、中国語は日本語と性格が異なるため、中国語としての漢文教育や漢文研究は次第に成立した。漢籍の言語、漢文は日本の国語教育の一部として位置付けられている。そして、国語教育、日本文学、言語史研究、史料学などの分野において、漢文研究が大きな役割を占めている。しかし、ロシアにおける日本語教育では漢文が十分に取り上げられているとは言い難い。

第3章では、漢文が必須科目の中で取り上げられる大学があることが明確にされた。しかし、学習者に対する調査からは、漢文に対して興味関心を持たない学習者もいる事実が確認できた。そこで、必須科目の中で漢文の基礎を勉強させられる学習者の動機付けが問題となる。

漢文学習の意義および学習者の動機づけについて触れる。国際交流基金により実施された「2009年海外日本語教育機関調査」の結果をみると、ロシア人が日本語を学習する動機は、①日本文化または日本語そのものへの興味、②日本関連の企業への就職の希望、③日本への留学・就職の希望、④大学院への進学、研究・教職の希望という4グループに分けられる。④の研究者などを希望するグループ以外の学習者は多数派であり、漢文学習に対して消極的であることが予想される。日本文化・日本語に興味のある学習者は漢文教育にも、関心を示す場合もあれば、就職などに役立つ実用的な日本語を必要とする学習者は漢文教育に対して否定的であることは今回の学習者に対する事例研究にも表れた。したがって、上記のように研究者希望の学習者のみならず学習者全員が漢文の学習がカリキュラム化される場合は、漢文学習の重要性を特に強調することが必要であると考えられる。

漢文教育は日本の歴史・日本文学・日本思想の研究に必要不可欠であるのみならず、自分の現代日本語に対する理解度を深めるためにも役に立つ。調査協力者の発言に現れた「漢文の難しさに触れることにより、現代を身近に感じる」とい考えもその一例である。また、漢字文化圏の学習者にとって、漢語および漢文由来の表現は日本語理解を深めるのに対して、ロシアの学習者は最初の段階では漢語を機械的に記憶せざるを得ない。そこで、意味を理解したうえで学習する方が定着しやすいであろう。例えば、漢文に「所」という漢字が受け身の意味を表すことを知っていれば、「所要時間」に「所」が使われる理由が理解できる。または、「下が上に剋つ」と訓読すれば方法を知識として知っていれば、「下剋上」という単語の意味が理解しやすくなる。同様に、漢文教育と漢字指導の関連性、四字熟語などを活かせることが有意義であると考えられる。

5. 2. ロシアにおける日本漢文教育の内容の選定

上記では、必須科目としての漢文教育の動機づけについて触れたが、研究者志望の学習者または個人的に漢文に興味のある学習者など、一部のみの学習者が対象となる

日本漢文の教育も必要だと考えられる。その際には、漢文についての深い理解力や漢文読解力が目標設定されることとなる。

現在、ロシアでは漢文が「古文」とセットで教育されている場合が圧倒的に多い。漢文を訓読するためには古典文法の知識が必要となるため、概説的な授業ではそうせざるを得ないと考えられる。しかし、浅川(2012)で指摘されているように、日本語の文体は漢文系と和文系に分かれ、相互に影響を与えてきたが、文体としては本来異なる系統である。そこで、漢文を本格的に勉強したい学習者の場合は、負担の軽減と混乱防止の観点から、漢文系統と和文系統の相違を意識したコースデザインが望ましいと考えられる。

なお、本格的に漢文を勉強することの意味と目的についてもここで触れたい。学習者は何ができるようになれば「漢文が読める」と認めて良いのであろうか。

表IV. では、漢文解読を段階的に分け、学習者に求められる多様な知識や能力について整理した。

表IV. 漢文の読解過程

読解過程	例①『書経』	例②『吾妻鏡』文治元(1185)年11月15日条、源頼朝の書状
(原漢文)		
↓		
白文	有備無患	(前略)仍日本第一大天狗者更非他者歟(云云)
↓		
訓点付きの漢文	有 _レ 備無 _レ 患。	(前略)仍日本第一大天狗者、更非 _二 他者 _一 歟(云云)。
↓		
訓読	備へ有れば患へ無し。	(前略)仍りて日本第一の大天狗は、更に他者に非ざるかと云々。
↓		
現代語訳	普段から準備をしておけば、いざというとき何も心配がない。	「(前略) 依って日本第一の大天狗は、他ならぬその者か」という。
↓		
母国語訳	Кто подготовлен, тому незачем переживать. (Well prepared means no worries.)	«...Значит, главный <i>тенгу</i> Японии – не кто иной как он?» (“...So, is the greatest Japanese “tengu” no one else but him?”)
↓		
解釈など	漢文訓読体「備えあれば憂いなし」の形で慣用句化し、漢文訓読体が一般的に親しまれている一例である。	源頼朝が後白河天皇に対して使った文句として非常に有名である。(但し、実は高階泰経に対して使われたという見解もある)。

学習者は漢文の原資料を翻刻し、訓読し、訳文が作成できるようになるのが理想的であるが、現実には時間が限られているため、その理想的な実現は不可能に近い。したがって、上掲の読解の流れの一部に焦点をあてざるを得ない。そこで、多くの教科書及び参考書と同様に「白文」を「訓読文」にする段階に主軸を置くのが妥当であると考えられる。

日本語と異なる中国語である漢文を読解するために、日本人は訓読という方法を用いた。日本では漢文に訓点をつけ、あるいは付けたかのように、日本語として訓読してきた。数百年にわたり、訓読文に口語訳をつけることは必要とされなかった。すなわち、日本の教養層においては「日本漢文が読める」＝「訓読ができる」ということであった。現在でも、訓読が漢文資料の読解課程において重要視されている。しかし、外国人学習者にとっては漢文資料の意味を理解するには、訓読文の作成だけでは不十分であり、口語訳または母国語訳の作成の段階も必要であると考えられる。

なお、上掲の表Ⅳ. から窺えるように、漢文の学習に際して、漢籍のみならず、日本漢文の資料を題材にすることも可能である。返り点や再読文字の説明などをはじめとする導入の部分においても、日本語に定着している四字熟語、慣用句、日本の純漢文を活用すれば、学習者の側に漢文を日本語の一部として捉える意識が定着し、漢文への関心度が高まることが期待できる。

日本の国語教育の影響で、日本語教育においても「漢文は日本語ではなく、中国語である」という考え方が定着している。しかし、日本の国語教育で中国語の漢文が扱われているのは、その目的が中国の古典の学習であるためであろう。一方、外国人学習者にとっての学習目的は、日本の言語・文化・歴史などを学ぶことにあり、中国語の代わりに日本の漢文資料あるいは現在日本語に定着した漢文由来の名句を使用することが妥当であると考えられる。

6. おわりに

本稿では、日本語とロシア語による先行研究の成果を踏まえ、ロシアにおける日本研究について簡潔に整理したうえで、その中での日本漢文の研究および教育状況に関する調査の結果について報告した。

専門的な日本語教育を提供する教育機関に対する調査では、漢文を取り上げる授業形態には、日本言語史の講義での紹介が一般的であり、漢文のみを取り上げる演習形式の授業は稀であることがわかった。その点から、限られた教室時間で可能な限り多くの作品が紹介されるコースデザインの必要性が窺えた。

一方、学習者に対する聞き取り調査では、学習者が漢文を難解と考えているにもかかわらず、日本漢文に対して関心を抱いていることが明らかになった。日本漢文への関心を促すことは、漢文の学習が日本文化および現代日本語への理解度をより高めることに繋がるという期待がある。即ち、適切な動機付けおよびコースデザインの工夫によって、「漢文は日本文化のひとつである」という意識を育てることができると考えられるのである。

そこで、日本の国語教育で扱われている漢文資料を今日の生徒が関心を持てるものに置き換える提案が荒木(2009)により紹介されたのと同様に、日本語教育においても学習者が関心をもてるような資料を題材とすることが提案できる。限られた教室時間で効率よく資料を紹介する観点からも、また、学習者の関心を高める観点からも、日本漢文の授業で取り上げる題材として、日本の古文書・古記録・歴史書などの資料を採用する提案も考えられる。日本漢文の作品、現代日本語に定着した漢文由来の定型句と四字熟語の使用により、学習者は漢文を単なる一般教養としてではなく、日本を知るための実用的な知識として位置付ける効果も期待できるであろう。

非漢字文化圏の学習者にとっては、漢字の学習自体が困難であるとされ、漢文の学習に関してはその必要性すら疑問視されている。町泉(2009)では、「日本漢文学の世界的研究拠点」プログラムの中間報告に際して、「漢文を読めるように訓練して何をやらうとするのか」または「漢文研究を世界的に行う意義は何か」などと外国人に対する漢文教育の意義を問われたと記述されている。

そこで、非漢字文化圏の国、ロシアにおける日本漢文の教育実態について調査した結果、漢文のコースが設置されている大学の存在が確認できた。同時に、学習者に対する聞き取り調査から、日本漢文学習に対する好意的な態度が窺えた。小規模で限定的な調査ながらも教育者側にも、学習者の側にも日本漢文に対する需要のあることが窺え、日本漢文の教育の必要性を裏付ける結果が得られたと考えられる。

参考文献

- 浅川哲也(2012)「口語文法における「口語」とは何か—日本語文体史と口語文法との関係—」『新国学』復刊第4号
- 荒木竜太郎(2009)「漢文教育テキスト素材選定の試案」『活水論文集. 現代日本文化学科編』第52号 pp.13-33
- 加藤百合(2008)『ロシア史の中の日本学』東洋書店
- 川本皓嗣(2010)「漢文訓読とは何か—翻訳論と比較文化論の視点から—」『大手前大学論集』第11号 pp.1-26
- 高野明(1952)「ロシアにおける日本語学校と伝兵衛」『日本歴史』第50号 pp.27-28
- 築島裕(1980)「漢文」『国語学大辞典』東京道出版
- 寺川喜四男(1964)『全世界の日本学会議とソビエトの日本語研究』法政大学出版局
- 『日本語教育国別事情調査 ロシア・NIS 諸国日本語事情』(2002)、国際交流基金国際日本語センター
- ピジョー、ジョーン(1989)「アメリカにおける日本古代史研究—私の個人的評価—」『史學雑誌』98(6), pp.1128-1141、公益財団法人史学会
- ポート W.J.(2005)「ヨーロッパにおける日本漢文学研究の現状と課題」『世界における日本漢文学研究の現状と課題 2005 年国際シンポジウム報告』二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム

- 町泉壽郎(2009)「海外の日本研究者における日本漢文の需要と対応」『東方学』第118号 pp.140-150 東方学会
- 光本光徳(1963)「漢文指導の方法—歴史文学の場合—」『国語教育研究』第7号 pp.32-42 広島大学教育学部光葉会
- ロバート・ボーゲン(2005)「英語圏における日本漢文学研究の現状と課題」『世界における日本漢文学研究の現状と課題 2005年国際シンポジウム報告』二松学舎大学 21世紀COEプログラム

ロシア語の参考文献

- Алпатов В.М.(1991) Репрессированные японисты, Япония 1989. С. 310-319.
アルパートフ V.M.(1991)「抑圧の犠牲となった日本研究者」『1989年の日本』pp.310-319
- Ермакова Л.М.(2005) Вести о Япан-острове в стародавней России и другое, Языки славянской культуры
エルマコーワ L.M.(2005)『昔のロシアにおけるヤパン島に関する知識など』スラブ文化の諸言語出版
- Философский факультет Санкт-Петербургского университета (2002) Российский гуманитарный энциклопедический словарь, ВЛАДОС
サンクトペテルブルク大学哲学部編(2002)『ロシア文系事典』ヴラドス出版社
- Маевский Е.В.(1991) Учебное пособие по старописьменному японскому языку (бунго), Издательство Московского университета
マエフスキー E.V.(1991)『日本の昔の書き言葉(文語)の教科書』モスクワ大学の出版会

付記

本稿は2012年7月に開催された首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会で口頭発表した内容に加筆したものです。席上、御指導くださった方々に御礼を申し上げます。この研究を御指導くださった浅川哲也先生に御礼を申し上げます。

(ぐりぶ でいーな・首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程)